

ハンブルク医師会報告 (1902年10月21日)

Ärzt. Verein Huamburg. 21. X. 1902

Fortschr Röntgenstr 6:106,1902

Frieben 氏は、33歳男性の右手背に、長年にわたるX線の影響によって発生した皮膚癌の症例を供覧した。患者は、当地のX線管球工場の従業員で、4年間にわたって自分の手をX線テスト用の被写体として使用していたが、点、前腕、顔面、胸部に広範な色素沈着を生じ、特に手には慢性放射線皮膚炎を生じた。1901年7月、まず小さな潰瘍が出現し、長期にわたって治療したが治らなかった。1902年1月、患者はDr. Hahnの治療を受けたが、この時右手背には5マルク硬貨大[訳注：約3cm]の潰瘍があり、辺縁はわずかに急峻に立上がり、底部には肉芽腫があり、放射線潰瘍の特徴を備えていた。Zittmann処方により一時的に軽快したが、治療中止後は潰瘍が周囲および深部に急速に拡大した。

その後民間療法医の治療を受けたが、2か月後、

1902年3月に再来した。手背全体が潰瘍に覆われ、基本的に腱鞘が露出していた。辺縁は周堤状で、潰瘍の中心は肉芽組織内を深い溝が錯綜し、壁状の隆起が走っていた。患者は緊急にEppendorf病院に入院となった。Dr. Sickの診断は皮膚癌であった。この時点では、それまでなかった肘部～腋窩リンパ節の腫大が認められた。肩関節で上肢を切断した。組織診断は、典型的な皮膚癌であった。

ミュンヘンのRieder他数名の論文によると、X線には殺菌作用があることになっている。この症例から推測されるように、殺菌作用の累積によって癌が発生するすれば、癌が寄生的疾患であることに反証する注目すべき事実であると思われる、とFrieben氏は述べている。